配付資料３

有明夏夫ほか文学関連資料の寄贈について

１　有明夏夫関連資料

（１）寄贈の経緯

本県ゆかりの直木賞作家 有明夏夫氏の甥 草原光啓（くさはらみつひろ）氏（大阪市在住）に、奈良市の有明氏自宅書斎内に残っている資料の寄贈を依頼したところ快諾いただいたため、当館に資料を一括して受け入れることとなった。

有明夫人の斉藤和子氏と、生前から資料の貸与など図書館の展示に協力いただいていたが、和子夫人の急逝により、相続人の草原氏に寄贈を依頼したところ、本県と夫人が交流していたことを知り、このたび快諾いただいた。

（有明夏夫プロフィール）

昭和１１（１９３６）年 大阪府生まれ。戦時中、祖父母の家がある福井へ疎開し、小学校から高校卒業までを過ごす。

昭和５４年 『大浪花諸人往来』で直木賞受賞。同作品はNHKドラマ「なにわの源蔵事件帳」の原作となった。幕末の福井大野藩が舞台の『幕末早春賦』や、福井市の高校生の生活を描いた『俺たちの行進曲』などの著作がある。

平成１４（２００２）年死去（６６歳）

（２）内容

種別	点数	内容
原　　稿	16 点	・ワープロ原稿「続・誇るべき物語」 遺作、未完のまま死去 ・未発表自筆原稿「リブリスの嘆き」、「赤と白のハレルヤ」
自筆ノート類	66 点	・自筆ノート「ＦＬ無宿のテーマ」 小説現代新人賞を受賞したデビュー作の草稿 ・手帳、ノート　等
蔵　　書	約 2,000 冊	幕末・明治などの歴史資料や国内外のミステリー小説、『群書類従』の一部など全集類、専門書　等
その他	約 400 点	・懐中時計（直木賞賞牌） ・万年筆 ・スーツ ・机、椅子、ワープロ、写真 ・有明宛て書簡（出版社ほか） ・執筆資料（関連資料コピー等）
計	約 2,500 点	

（３）資料としての価値

有明夏夫氏の資料をまとまった形で所蔵する施設は他にない。資料の散逸を防ぎ、氏の功績を後世に遺すために、今回の寄贈は重要であり、貴重な資料である。

（４）資料の公開

９月２４日（土）から、ふるさと文学館で資料の一部を公開予定

2　中野重治および中野鈴子関連資料

（１）寄贈の経緯

中野重治関係者への資料寄贈の依頼を継続して行ってきたところ、鰻目卯女（えのめうめ）氏（中野重治長女・東京都在住）および能登素（のともと）氏（中野重治姪・福井市在住）から、自宅に保管している資料について寄贈の申し出があった。

（中野重治プロフィール）
明治３５年高椋村（現坂井市）生まれ。東京帝国大学卒業。
四高時代から創作活動を始め、室生犀星に師事。プロレタリア文学運動を推進するが、獄中生活の後、転向する。戦後、新日本文学会を創立。昭和３５年、故郷一本田の少年時代の暮らしを描いた自伝的小説『梨の花』で読売文学賞受賞。

（中野鈴子プロフィール）
明治３９年 高椋村（現坂井市）生まれ。中野重治の実妹。
重治を頼って上京、検挙された小林多喜二の救援活動を行う。ナップ（全日本無産者芸術団体協議会）に参加し「働く婦人」を編集。戦後、新日本文学会福井県支部を結成し、昭和２６年に青年学生たちと文学誌「ゆきのした」を創刊。
室生犀星や佐多稲子、壺井栄と親交がある。昭和３３年病没（５１歳）

（２）内容

資料名	内容
中野鈴子自筆遺言	兄の重治や妹らに宛てた遺言。 昭和３２年１０月２日付(亡くなる約３か月前、S３３．１月逝去) 執筆活動を続けながら自身が耕作してきた故郷丸岡の土地や自身の遺品の分配のこと、墓を屋敷内に作ってほしいこと、家族への感謝の気持ちなどが書かれている。 原本未公開（内容は研究会誌で報告された）
中野重治宛て鈴子書簡	執筆年月不明。 佐多稲子、壺井栄と泉鏡花の「滝の白糸」の活動写真を見たことの感想など、日々のことを綴ったもの。未公開
中野重治自筆はがき	中野重治夫妻から能登素氏へ宛てたはがき。 １９７３年5月３０日付。 能登氏からの贈り物に対するお礼が書かれている。
中野鈴子宛て書簡	詩人（則武三雄、伊藤信吉、山田清三郎）から送られた書簡。 鈴子の病状を気遣った見舞いの手紙。

このほか、写真、鰻目氏宛て書簡など　計２０点

（３）資料としての価値

妹中野鈴子が兄中野重治や家族に宛てた肉筆の遺言は、家族へ向けた普遍的な愛情を直に感じることができる資料として価値が高い。

（４）資料の公開

秋季企画展「中野重治展」（１０/１５～１２/１８）にて展示予定

3　橘曙覧関連資料

（1）経緯

三菱食品㈱代表取締役社長 森山透氏から、福井市の実家に所蔵する橘曙覧の屏風を寄贈したいとの申し出があった。

（2）内容

・六曲一双屏風　１点

橘曙覧の著作「沽哉集（こさい）」に掲載されている「初ゆき」「田家鳥（でんかのとり）」の内容を記載した屏風

〇沽哉集

内容は自然の風景などを題材にした感想文で、タイトルは論語にある語から名付けた。年代は不明、原本は現存していない。

橘曙覧は、随筆集『囲炉裡譚（いろりがたり）』や旅行記『榊（さかき）の薫（かおり）』など多くの文集を遺しており、「沽哉集」もその一つ。

（3）資料としての価値

福井市郷土歴史博物館長角鹿尚計氏および広島大学大学院教授久保田啓一氏が鑑定を行った結果、曙覧直筆の稀少な作品であることがわかった。

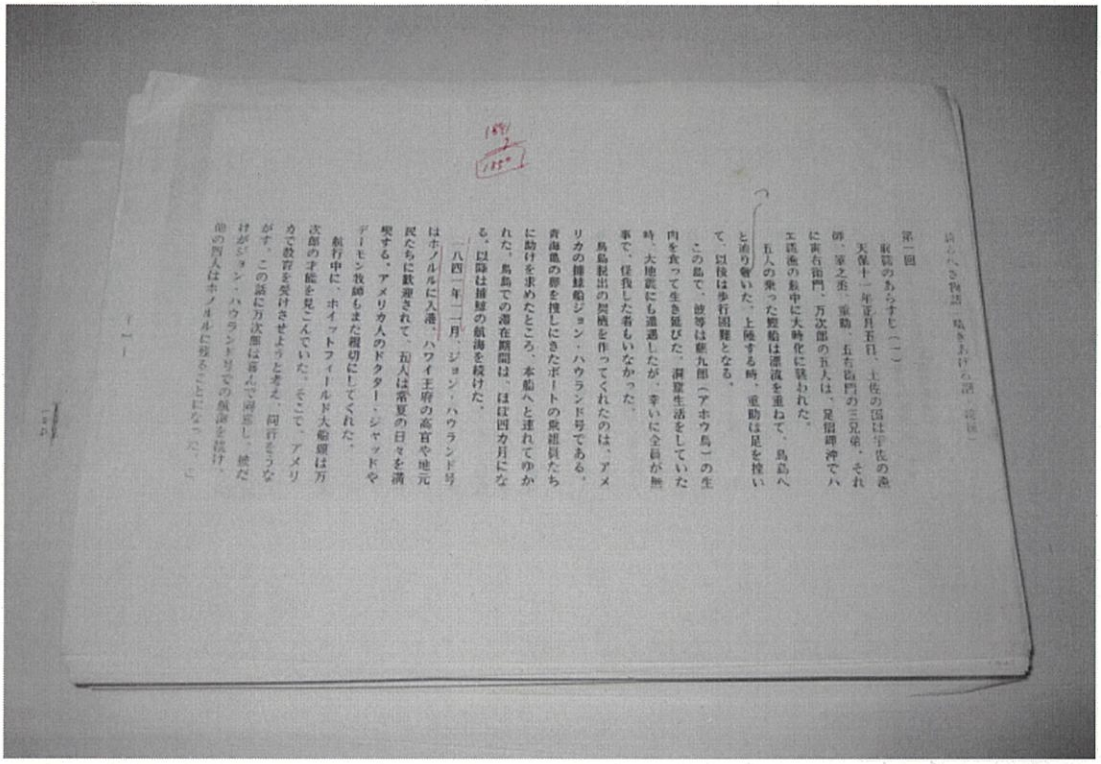
沽哉集は、原本が現存しておらず、曙覧が時々に書いた書が個別に残っているだけである。今回そのうちの２編が新たに見つかったので、今後、専門家の協力を得て研究を進めていきたい。

（4）資料の公開

来春の新収蔵品展において公開予定

有明夏夫関連資料

○遺作「続・誇るべき物語」ワープロ原稿



続・誇るべき物語　鳥をおけの譜（抜粋）

第一回

嵐鶴のあらすじ（一）

天保十一年夏月五日、土佐の国は宇佐の漁
師、筆之丞、重助、五右衛門の三兄弟、それ
に寅右衛門、万次郎の五人は、足摺岬沖でハ
エ漁の最中に大時化に襲われた。
五人の乗った漁船は漂流を重ねて、鳥島へ
と辿り着いた。上陸する時、重助は足を挫い
て、以後は歩行困難となる。
この島で、彼等は熊九郎（アホウ鳥）の生
肉を食って生き延びた。洞窟生活をしていた
時、大地震にも遭遇したが、幸いに全員が無
事で、怪我した者もいなかった。
鳥島脱出の架橋を作ってくれたのは、アメ
リカの捕鯨船ジョン・ハウランド号である。
青海島の鯨を捜しにきたボートの乗組員たち
に助けを求めたところ、本船へと連れてゆか
れた。鳥島での滞在期間は、ほぼ四カ月になる。以降は捕鯨の航海を続けた。
一八四一年一二月、ジョン・ハウランド号
はホノルルに入港。ハワイ王府の高官や地元
民たちに歓迎されて、五人は常夏の日々を満
喫する。アメリカ人のドクター・ジャッドや
デーモン牧師もまた親切にしてくれた。
航行中に、ホイットフィールド大船頭は万
次郎の才能を見こんでいた。そこで、アメリ
カで教育を受けさせようと考え、同行をうな
がす。この話に万次郎は喜んで同意し、彼だ
けがジョン・ハウランド号での航海を続け、
他の四人はホノルルに残ることになった。

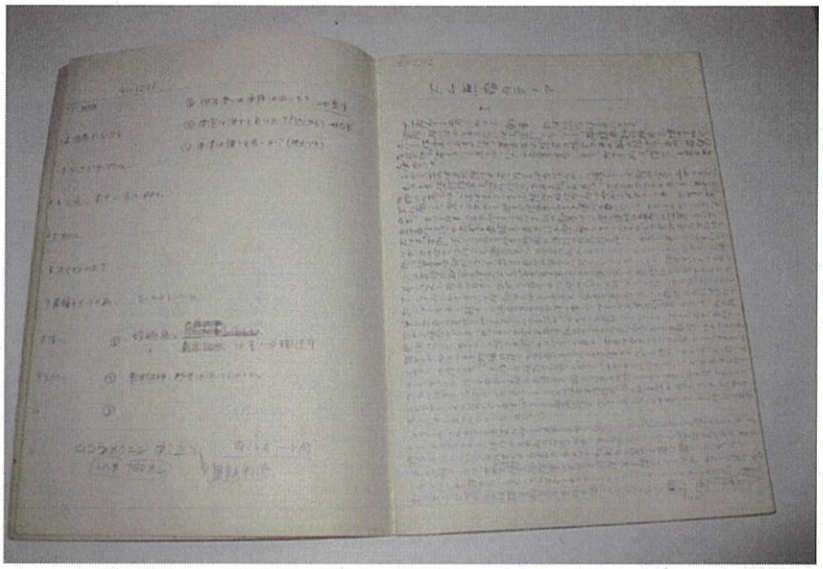
〈説明〉

『誇るべき物語―小説・ジョン万次郎』（平成５（１９９３）年、小学館）の続編で、自身が敬愛するジョン万次郎の後半生を描いたものだが、最終章を残して病に倒れたため、本作が遺作となった。有明氏は、この作品を自身の代表作とするべく、執筆に取り組んでいた。

平成１４（２００２）年の有明氏の死後、未完のまま、平成１６（２００４）年４月から平成１８（２００６）年９月まで、高知新聞に連載された。単行本は未刊。

今回寄贈された資料の中には、幕末や船舶に関する図書や、この作品を執筆するために調査した資料のコピーなどが多く含まれている。

○「ＦＬ無宿のテーマ」自筆ノート



〈説明〉

１９７２年に第１８回小説現代新人賞を受賞した「ＦＬ無宿のテーマ」の草稿と考えられる。同作は第６７回（１９７２年上半期）直木賞の候補作ともなった。

ＦＬとは Foreign Literature の略で、ＦＬ無宿という外国文学系の中退者で定職についていない主人公がしたたかに生きる様子を軽妙に描いた小説。

○直木賞正賞（懐中時計）

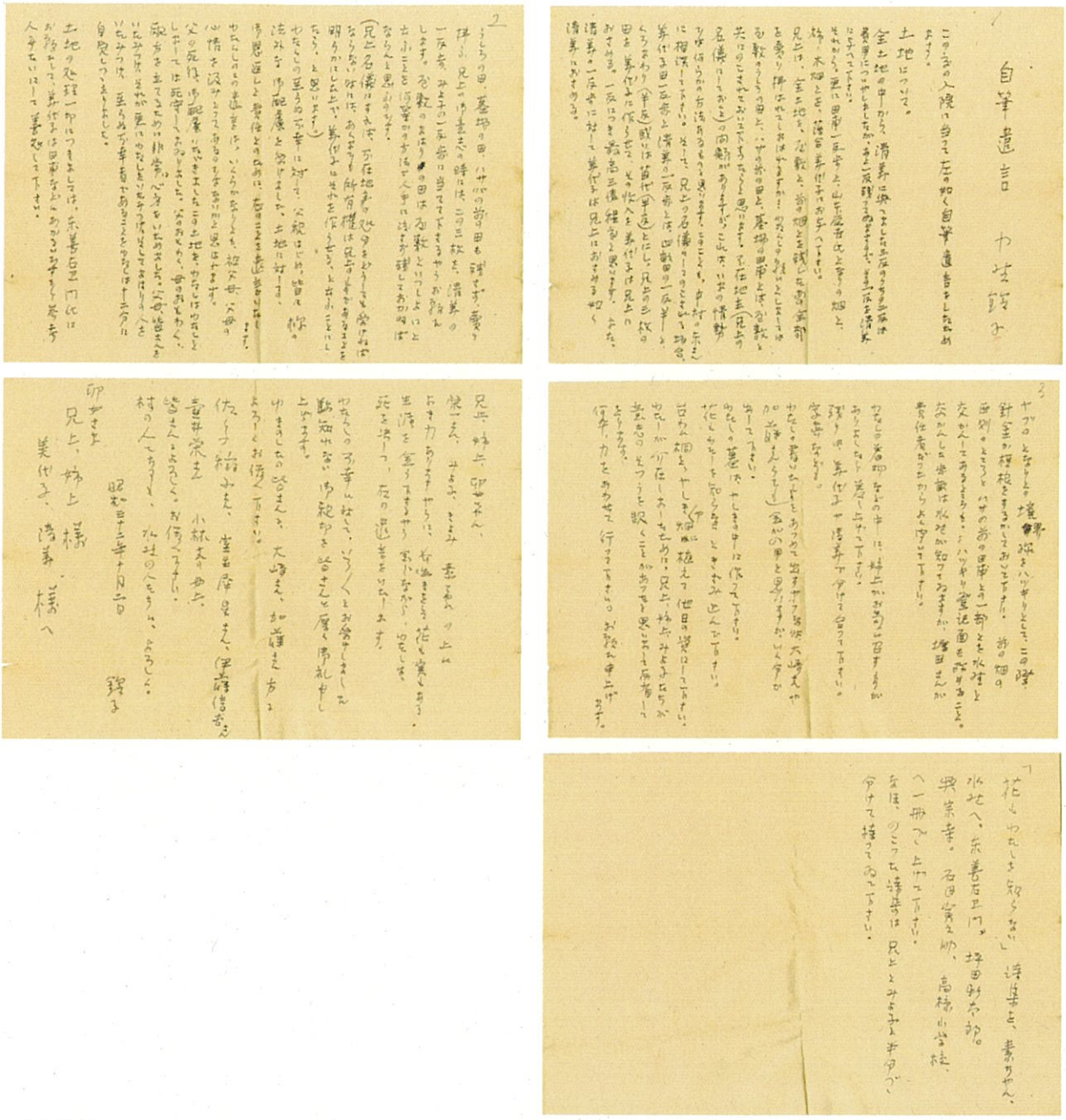
〈説明〉

『大浪花諸人往来』で第８０回（１９７８年下半期）直木賞を受賞した際に正賞として送られた懐中時計。セイコー製。

選考会および贈呈式は１９７９（昭和５４）年に行われた。有明氏は５回目のノミネートで受賞した。

中野重治および中野鈴子関連資料

○中野鈴子自筆遺言



〈説明〉

昭和３２（１９５７）年１０月２日付。封筒には「大崎栄太氏にたくす」と書かれている。

『中野重治研究会会報 ｀９４』に、活字版が掲載されている。

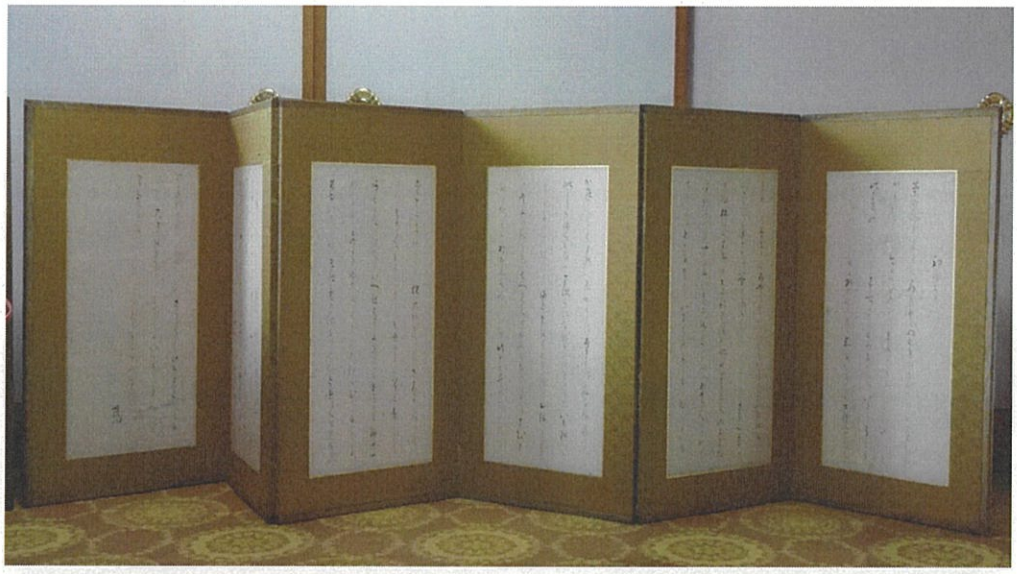
中野鈴子は、亡くなる約３カ月前、東京の三井厚生病院に入院するにあたり遺書を執筆、郷里の大崎栄太（ゆきのした同人、旧丸岡町議会議員）に託し、死後開封を依頼した。遺書には、執筆活動をしながら耕作を続けてきた丸岡の田畑の分配のことや、家族への感謝の思いが綴られている。

東京で手術を重ねるが、快復にいたらず、死の前日より「人間はこうして死ぬんかいや。もう泣かんわい。毎日泣いとったから」とうわ言を言い、昭和３３年１月５日、中野重治ほか家族や佐多稲子などに看取られ永眠。

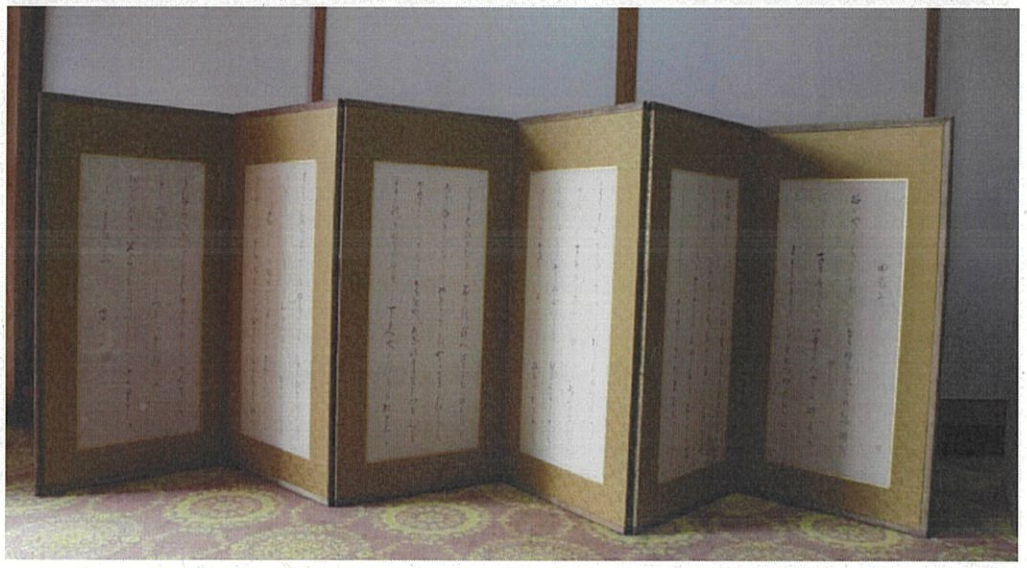
死後、鈴子の遺志を受け継いだゆきのした同人らにより『中野鈴子全著作集』が刊行された。また、墓石に「花もわたしを知らない」と刻んでほしいと望んだ鈴子の遺志もあり、中野重治生家跡に詩碑「花もわたしを知らない」が建立された。

橘曙覧関連資料

〇初ゆき



〇田家鳥



〈説明〉

橘曙覧には、死後、息子の井手今滋(いでいましげ)が曙覧の原稿を整理編集した『志濃夫廼舎歌集(しのぶのやかしゅう)』の他、随筆集『囲炉裡譚(いろりがたり)』や旅行記『榊(さかき)の薫(かおり)』など多くの文集が遺されている。『沽哉集(こさいしゅう)』は、橘曙覧が他人の求めに応じて文を作り、または書を書いて売るための資料として作っておいた文集で、自然物、自然の風景などを題にした感想がまとめられている。

今回、寄贈された屏風には、『沽哉集』に収められている「初ゆき」、「田家鳥(でんかのとり)」という文書が記されている。

「初ゆき」は、茶の湯仲間が初雪を愛でていたのに、仕舞には庭の品評になったという冬の和やかな情景が綴られている。

「田家鳥」は、干している穀物を食べようとする雀と、それを追い払おうとする老婆、という秋の穏やかな情景が綴られている。

いずれも、日常生活に題材をとり、身近な言葉で表現するという橘曙覧の特徴がよく表れた作品である。

担当：生涯学習・文化財課